

長泉町・さわやかハイキング報告書

通算山行NO	個人山行	報告者	井上弘二郎
年 月 日	2010年4月18日(日・晴下部は霧)	2万5千円	印野・須走
山 名	富士山・宝永山(2693m) 御殿場ルート		
体力度=4・やや厳しい 技術度=3・普通 藪漕=無し 道標=ある トイレ=なし 展望度=◎ 三角点=ない			
<b>4月の富士山、雪歩きと山スキー</b>			
コース とタイム	長泉5:30—御殿場口太郎坊洞門スタート6:40—小屋(須山旧二合八勺)9:00—宝永山直下(休憩)10:50~11:20下山開始—洞門駐車場着13:25—長泉着14:30頃(参加費=1000円)		
標 高 差	上り 御殿場口太郎坊1290m~宝永山直下2665m=約1375m 下り 同上		
参 加 者	CL 後藤隆徳、井上弘二郎、工藤八郎(群馬より)以上3名山スキー隊、石和加代子、村上美恵子、以上2名つぼ足隊 合計=5名		

週末金曜日に突然真冬に戻ったような寒さになり、御殿場も雪が降ったと聞いた。国道246号線から富士山を見ると、なるほどニツ塚まですっぽりと雪で覆われ真っ白になっている。キャンプフジ横の道路わきの桜は満開だ。天気も良く期待でいっぱいであるが、1年ぶりの山スキーで不安も大きい。

太郎坊の駐車場にはすでに5,6台駐車しており、私たちの車はトンネル入り口側に戻り道路脇に停めた。群馬から参加の工藤さんは昨夜から来ていたとのこと。

スキー、スキーアイゼンを装着し雪の林間を登っていく。後藤さんと工藤さんの速さについていけず、どんどん離されていくが、見失っては取り残されてしまうので必死に追った。林を抜けると、沢から歩き始めた女性2名のつぼ足隊の後方に出た。



しばらくつぼ足隊を追うようにして進んだ。はるか前方に私たちより早く出発した

人たちが5, 6人見える。私たちは2つに分かれ、私と石和さんが速いペースの後藤さんに食らいついて歩き、工藤さんと村上さんが少し遅れてマイペースで進んだ。汗が滴り落ち、体から毒素が抜けていくようだ。

中間地点の小屋で全員集合し、後藤さんと私はすぐに出発。雪面はモナカ状でサクサクと音がして、歩きやすい。途中、先行していた人たちを抜いていく。宝永火口の稜線になだれのあとが見えた。時々よこなぐりの風に体をさらし、上半身はTシャツ一枚だったので急に寒くなる。直径3mくらいのつむじ風が目の前を通り過ぎ雪煙を巻き上げる。風が作る雪の模様、風紋がきれいだ。振り返ると高度差がすごい。いつの間にかこんなに高いところまで来てしまっていた。



(下) 工藤さん撮影



しばらくして先に行つてよしとの指示が出たので、自分のリズムで徐々に前に出た。今までの山スキーで後藤さんより遠くへ行ったことはなく、いつも遅れ、しかも低い地点でギブアップして悔しい思いをしていたので、これはチャンスと思い、自分を試すことにした。2575mのところで、後藤さんはつぼ足隊を待つことにした。

行ける所まで行き、雪の宝永火口を覗いてやろうと思った。高度計をちらちらと見ながらあと15m、あと10m。あと5mと頑張ったが、2690mの宝永山の下2665mで進めなくなった。スキーの滑り止めのシールが効かなくなり、次の一步が登れなくなった。目の前に火口の縁が見えるのに体力の限界だった。

90m下で後藤さん、石和さん、村上さんが休憩をしている。私と後藤さん達の間位置に工藤さんがいる。誰よりも高いところにいるのが気持ちよかった。ここまでは良かった。問題はここから。

ブーツとビンディングを滑降モードに切替え、いざ下ろうとするが、脚に力が入らず、スキーを思うようにコントロールできない。内側のエッジを立てるために膝を内側に絞るだけの力が足りない。いつもならスキーの先端を押さえて、方向を自在に操れるはずの力が残っていない。また、宝永の直下は斜面が急で怖い。仕方なく、かっこ悪くてもプルークボーゲンで初心者のように安全に下ろうと決めた。

滑り始めて1, 2回ターンして止まった所で、パタンとこけ、左ひざを雪面についた。その時、痛みを感じたので見てみると、ジャージの膝のところが破れ、膝をついた雪の上に点々と血がついていた。ジャージの下にえぐったような傷が見えたが、気にすると降りられなくなりそうな気がしたので、気持ちを維持するようにしながら降り

その時、痛みを感じたので見てみると、ジャージの膝のところが破れ、膝をついた



工藤さんのスキー

井上さんのスキー



後藤さんのスキー

工藤さん撮影

その時、痛みを感じたので見てみると、ジャージの膝のところが破れ、膝をついた雪の上に点々と血がついていた。ジャージの下にえぐったような傷が見えたが、気にすると降りられなくなりそうな気がしたので、気持ちを維持するようにしながら降りていった。ようやく仲間のところにたどり着き、傷テープと三角巾で応急処置をしてもらった。山に来るときはいつも三角巾を持っていたが、使うのは初めてだった。

血は止まっており、骨や筋に異状はないようだ。あまり痛くない素振り而降りた。先行する後藤さんと工藤さんのきれいなシュプールがうらやましい。周囲のガスが濃くなってきて、中間の小屋がなかなか見つけられない。わずかなガスの晴れ間で小屋を発見し自分たちの位置を確認する。濃くなったガスが気になるが、ここからスキー隊は二ツ塚を目指すことにした。群馬からはるばる来られた工藤さんには是非二ツ塚を滑ってほしいという後藤さんの考えであった。

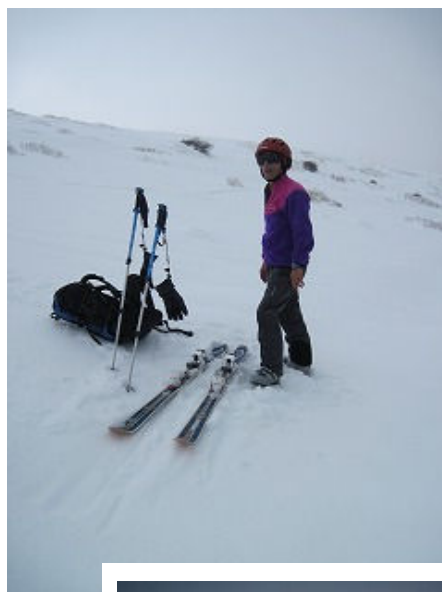
辺り一面真っ白で、雪面の凹凸が見えない。脚に力が入らないので、見えない雪面の変化についていけず、段差ごとにうわっ、うわっと言いながら2人のスキーヤーについていった。振り返ると、つぼ足レディチームが下りてくるのが見える。今日は、私のスキーもつぼ足もスピードは大して変わらない。二ツ塚を滑り終わり、沢を越え、分岐の標識でつぼ足隊を待つことにした。

ガスがかなり濃いので、お互いに居場所が分からない。ここでホイッスルが登場する。三角巾に続く5年目にして初めて使う道具だ。携帯電話で話しながらホイッスルを吹き、音の方向へ誘導した。やがて後方から、二人の姿が現れた。ローテクのすばらしさに感動する。到着したつぼ足隊もかなりお疲れの様子だ。ここからは沢を下り、もと来た林に入り駐車場に戻った。

今回の反省は2つ。1つは下りの体力を計算し登る必要性を実感した。2つ目は、ジャージでスキーをしないこと。もっと丈夫な生地の服装ですべきだと思った。反省しきりの中にも、限界まで挑戦した自分に満足しながら帰りの車に乗り、我が家へと帰った。



左右とも工藤さん



登山隊の  
石和・村上さん



工藤さん  
撮影

